特集
選挙の風景

選挙は「お祭り」
―台湾―

松本 充豊

●選挙運動

台湾の選挙は派手で、とにかくにぎやかだ。その様子を一度でも目にしたら、誰もが「お祭りみたい」と思わずにはいられないはずだ。

驚かされるのは、選挙広告のインパクトの大きさ。日本では公示日から専用の掲示板に整然とポスターが貼られるが、台湾にはこうした規制がない。選挙の季節ともなると、いつの間にか街中の至る所で、ビルの壁に候補者の巨大ポスターが現れる。路線バスは候補者の写真や名前が書かれた広告でラッピングされ、タクシーの車体にも広告が貼り付けられる。

なかでも圧巻なのが、色鮮やかな候補者の幟（のぼり）が幾重にも重なり合って、道路を覆い尽す光景だ。最近でこそ数は減ったが、かつては道路わき、ロータリーや中央分離帯に幟が立ち並び、歩道橋にも隙間のないくらい幟が付けられていた。数年前には「台湾で一番醜いもの」という名誉ある（？）称号を手にしたほどだ（参考文献①）。

街を歩いていて、大太鼓や銅鑼の音、爆竹が鳴り響く音が聞こえてきたら、それは「掃街」である。候補者が選挙カーに乗って街を走り回る。選挙カーは小型トラックを改造した「オープンカー」がほとんどで、車体には候補者の顔写真が載った広告が貼られ、荷台に候補者を載せて走る。これに小旗やポスターなどで飾った自動車、バイクや自転車が何十台も連なることなど珍しくない。大太鼓や銅鑼を叩き、爆竹を鳴らし、時にはロケット花火まで打ち上げる。とにかくド派手な演出である。沿道を支持者が埋め尽くし、スピーカーから候補者の名前が連呼される。にぎやかというよりは、正直やかましいくらいだ。

選挙運動は夜になってもまだまだ続く。夜開かれる大規模集会が「造勢晩会」だ。週末には演説のための特設ステージが至る所に設置され、夜になると候補者の演説を聞こうと人々が集まってくる。会場周辺には屋台が立ち並び、これまたにぎわいをみせる。屋台を営む人たちにとっても、選挙は絶好のビジネスチャンスなのだ。トップリーダーを選ぶ総統選挙ともなれば、投票日前日の最後の造勢晩会は、各陣営が趣向を凝らし、大いに盛り上がる。候補者の登場で、それは最高潮を迎える。会場を埋め尽くした支持者が小旗やうちわ、風船などを片手に、大合唱で候補者を迎える。その熱気とノリはコンサート会場さながらだ。人々は候補者の演説に興奮し、感動し、時に涙するのである。

●投開票

前日までと打って変わり、投票日は静かに始まる。台湾には期日前投票や不在者投票、在外投票の制度がない。台湾企業の最大の投資先が中国だが、現地で働く台湾人のビジネスマンやその家族が投票するには、わざわざ台湾に戻らねばならない。また、戸籍地（本籍地）でのみ投票可能なため、投票日前日には大勢の人が実家に帰っていく。投票日となる土曜日には、普段離ればなれに暮らす家族が顔を合わせる。とはいえ、投票のために交通費と時間をかけて帰省するのは、学生や若者にとって負担が大きい。二〇一六年一月のダブル選挙（総統選挙・立法委員選挙）では、多くの大学の学生会が学生に投票を促そうと格安の帰省バスを仕立てたことが話題になった。

投票所では入口に警察官が立っており、日本と比べていささか物々しい雰囲気がある。有権者は身分証、選挙の通知書と印鑑を持参して、確認後に投票用紙を受け取る。投票用紙は投票ごとにその都度渡されるのではなく、一度に

すべての選挙の投票用紙が手渡される。投票の仕方も日本と違って、有権者が候補者名や政党名を自分で書いたりしない。投票用紙には候補者名もしくは政党名とその番号が予め印刷されており、その上に四角い空欄がある。有権者は記載台に備え付けのスタンプをそこに押すことで、自分が支持する候補者や政党に投票するという仕組みだ。これなら何らかの事情で字が書けない人でも投票できる。

投票が締め切られると、投票所が開票所に早変わりし、即日開票が行われる。開票の様子は市民がみることもできるし、選挙特番一色となったテレビのニュースチャンネルがリアルタイムで伝えてくれる。担当者が投票箱から投票用紙を取り出し、一票ずつ開いて番号を読み上げ、別の担当者が候補者ごとの得票数を「正」の字で書いていくというスタイルだ。

当確が出る頃には、各陣営の選挙本部前の路上を支持者がまた埋め尽くす。当選者が決まり、勝者が姿を現すと、支持者は彼／彼女の勝利宣言に歓喜し、興奮の坩堝（るつぼ）と化す。敗北の弁を述べる敗者にも、支持者は声援を送り、そして涙する。民主化が完了してちょうど二〇年。一部の支持者が選挙結果を不服とし、混乱を招いた時期もあった。しかし、いまでは勝者も敗者も、そしてそれぞれの支持者も、結果を冷静に受け止めて、互いにねぎらい合う。民主主義の定着を実感する瞬間である。

●選挙管理

選挙の実施を取り仕切るのが、中央選挙委員会（中選会）である。選挙管理機関の国際比較では、独立モデル、混合モデル、政府モデルの三つのモデルに分類され、台湾の中選会はアジアの新興民主主義国で多くみられる独立モデルのひとつとされている（参考文献②）。しかし、こうした評価は必ずしも正確ではない。台湾と韓国はほぼ同時期に民主化したが、独立モデルの典型とされる韓国の選挙管理委員会に対し、台湾の中選会は混合モデルであり、むしろ日本の中央選挙管理会に近いかもしれない。

中選会は行政院（政府）に所属する三つの独立機関のうちのひとつであり、「中央二級相当」すなわち日本の各省庁にあたる各部会と同じレベルの機関である。独立機関とはいえ、韓国のように憲法機関ではないし、執政府からの高度な自律性も有していない。一方、日本の中央選挙管理会は総務省の附属機関だが、台湾の中選会は総務省にあたる内政部と同じレベルの独立した機関である。

混合モデルでは執政府の影響力の及び方が様々である。中選会の委員は、同一の政党に所属する委員が三分の一を超えてはならず、形式上は独立性が保たれている。しかし、実際には行政院長（首相）が推薦し、立法院（議会）の同意を得て任命されるため、これまでも委員の人選が二大政党間のイデオロギー対立とまったく無縁だったわけではない。また、専任の主任委員と副主任委員は有給職だが、他の委員は無給職であるため、委員の専門性とそれによる独立性が保障されているともいえない。

台湾の選挙管理では、「選政」と呼ばれる選挙関連法規の制定、修正と解釈は内政部の権限とされ、「選務」すなわち選挙の実施は中選会が担っている。中選会による選挙関連法規に関する提案は認められているが、それは内政部に対するもので、直接行政院に提案することはできない。こうした分業のあり方は台湾の選挙管理の歴史的経緯と深く関わっている。民主化以前、選挙管理は当初内政部が担っていた。一九八〇年の中選会の成立後も、内政部長（大臣）が主任委員を兼任し、職員のほとんどが内政部の職員だった。当時はこうした選挙管理体制がうまく機能していたのだが、二〇〇〇年に主任委員が専任職となり、中選会が独立機関と位置づけられていく過程で、中選会と内政部の間に矛盾が目立つようになった。

中選会の独立性についてはなお議論が続いている。独立モデルを理想とする考え方がある一方で、混合モデルの枠内で中選会の独立性の強化を図るのが現実的とする見方もある。

（まつもと　みつとよ／京都女子大学現代社会学部教授）

《参考文献》

①「選舉旗幟招牌 台灣第一醜」『自由時報』二〇一一年九月一六日。
② Lopez-Pintor, Rafael, 2000, *Electoral Management Bodies as Institutions of Governance*, UNDP.